

筆者が九大工学部応用理学教室に赴任したのは1985年であった。その後、数理学研究科に移り、さらに、数理学研究院・数理学府と名称や組織構成は若干変化したが、今から思えば、牧歌的であったとも言える2006年3月に定年で退職し、ようやく4年目に入った。年齢相応にくたびれている昨今ではある。

ところが、昨年春から、何とも不思議な縁で、筆者は久留米大学附設中学校・高等学校（久留米附設）の校長になってしまった。筆者自身は神奈川県出身であり、福岡に赴任後も息子たちは母校の系列校で学ばせたので、久留米附設について仔細に検討したことはなかった。九大時代の同僚教授にも久留米附設出身者が実に数多かったのだが、この点にも特に注意を払ったことはなかった。そもそも校長職の内容や意義にも無知のまま、話を持って来られた前々任の（つまり、元）校長の、午後は校長室での数学三昧でよろしいという説明を真に受けて、まさに鵜呑みにせんとはばかりに跳びついたとも言える。ところが、さまざまな課題があることは赴任してすぐにわかった。ここまでの一年間では、それらのすべては、まだ、理解できておらず、当然、対処の仕方も十分にはわかってはいない。その上、生活のリズムがすっかり変わってしまい、少なくとも今のところ、午後は数学三昧ということとは程遠い。

さて、久留米附設は、学年当たり中学150名（男子）、高校200名、高校時点での募集は共学で、女子が25名前後加わるという学校である。赴任後、同窓会名簿をざっと見て、久留米附設は、医師を典型として、社会の中堅らしく地味ながら手堅く仕事を果たしている人たちを育ててきた学校であるという印象を得た。現在はいろいろな意味で過渡期であり、筆者は同窓ではないので荷が重い面と気楽な面とが半々である。

久留米には西鉄大牟田線を通っている。福岡から通う生徒が多く、大体かれらと同じ時間帯の電車に乗ることになる。久留米附設の生徒たちの車内での行跡の評判は芳しくないが、実際、そういうのを目の当たりにもした。古い卒業生からのお叱りもあり、近年の傾向なのかとも思っている。校内でも、すれ違う生徒たち

ちらから声を掛けるようにしているが、最近、同窓会や保護者を含む訪問者からも生徒が挨拶をしたと驚かれるようになった。

実は、赴任直後に学園祭の関係で生徒たちからインタビューを受け、そのやりとりで、かれらが実に優れた素質に恵まれていることに強く印象付けられたが、一方、それと裏腹に学校を支配しているやや単調な価値観が大変気になった。筆者が赴任直後に目に見える形で行なったことは、一号館と呼ばれる建物の階段壁面に先輩たちの絵画作品を掲示する場を大幅に増やしたことであるが、これは実際に卒業生たちに感謝された。いずれにせよ、これだけの素質の生徒たちを預かっているのである。かれらをすんなりと伸ばし、かれらに相応しい幸せな人生の糸口をつけたい。それが筆者の気持である。しかし、問題は、誰もが予め設定してある道筋で伸びていくとは限らないことである。保護者の方たちにも一緒に考えてほしいことだが、生徒の人生と親の人生とは全く違う。親は、自分のことだけを考え、それに基づいて子供の人生に干渉しようとする。しかも、本当に「いい子」としか言いようのない久留米附設の生徒は（ものを知らないせいもあるが）おかしいと感じても抵抗しない。校長として一番苦しく感じるのは、この辺りであろうか。決して親に逆らえと言うわけではないのだが、生徒には君たちもっと冒険しろよと言いたいわけである。

附設に関しては、近年支配的な単調な価値観を打破するというより、多様な価値観が並立する学校にしたいというのが筆者の思いである。新年には歌会始の入選者が、七月にはブレーメンでの数学オリンピックに出場する生徒がいる。他にも随所で表彰されている子には事欠かない。だが、彼らのほとんどは恐らく冒険らしい冒険をせず、今この時点での判断で手堅く見えている道を歩むだろう。筆者の気持としては、一人でもいい、大芸術家、大政治家、あるいは、大数学者が産まれたらいいなことである。いずれも世界を変え得る人なのである。そういう人を産み出せたら、少なくとも、そういうことの意味がわかる雰囲気醸しだせたらいいというのが、素晴らしい素質に恵まれた生徒たちを見ながら思う昨今である。